

大量難民、ジャララバードに集中

降雨なし、河川の異常低水位

ガンベリ農場、オレンジ初収穫

事務局のみなさん、後藤・村上先生、

雨がありません。クナル河は、例年より二か月早く最低水位を記録しました。2000年規模の旱魃が迫っているように思われます。加えて、パキスタンからの難民送還が急ピッチで行われており、その数は既に100万~150万人、ジャララバード市内は、日に日に混雑が増しています。トルハム国境だけで、一日7000家族（7000名ではありません）が通過すると伝えられます。

作業地に行く際に通るバスド橋は、今週から大混乱で、300mの橋を渡るのに小一時間かかります。キャンプから買物にくる人、職を求める人、知り合いを訪ねる人、物乞いをする人、借家を探す人、とりあえず動き回る人、これらを客にする露天商やリキシャが加わり、市内は、信じられないような人の海が出来あがっています。

市の北部4郡（バスド、カマ、シェイワ、ダラエヌール）は平静ではあっても、9月以降、人口が爆発的に増えています。おそらく、帰郷できる者は10月初旬まで戻り、冬越しの準備をしていると思われます。それでも、川沿いにテント生活をする者が増え、ガンベリでも防砂林の無人地帯に、数百家族が新たに小屋を建てて生活しています。

ナンガラハル州政府もさすがに悲鳴をあげ、最近出された「ジャララバード集中策」の見直しを求める動きが出てきているようです。国連は麻薬栽培が3割増加と予測し、対策を訴えています。といっても、政府内部で対立が続き、行政がまともに機能していません。警官や兵士への弾薬補給・給与支払いさえ滞っている状態です。少し「教育」を受けて都市に住む若い人々は、自国を見限り、欧米への移住を目指す——まるで世界の終末を彷彿とさせます。しかし、ずいぶん前から予測された出来事です。今さら何を言いましょう。この状態でも大混乱に陥らないのは、少なくとも作業地の農村地帯が辛うじて安定しているからです。粛々と今の仕事を進めて参ります。

対岸地区では取水口の基礎工事が一段落し、コンクリート打設作業、用水路建設が間もなく始まります。予期せぬ低水位で、多少の不安がありますが、何とか堰の仮工事と900m地点までの開通を目指します。

ところで、ガンベリの果樹園では、待ちに待ったオレンジの結果が見られ始めています。今年が初の収穫になると、みな感慨ひとしおです。一か月後に色づいたらまたお知らせします。

基礎工事を終え、上部の建設が始まった取水口付近。今回の堰は、岩盤沿いの主要河道に設けられるが、土砂堆積を避ける工夫が求められる。平坦な河川敷は、幅約1 km弱、大量の砂礫が流れる。今後予想される超低水位対策も併せ、①ミラーンの「部分可動堰」、カシコート・カマ I の②湾曲斜め堰を採用するもの。低水位になって、河道①内の河道洲がはっきり姿を現し、洲の前縁と後縁が交互に折り重なっているのが見える。一筋縄で行きそうにない。2016年10月27日



取水口より下流部の眺め。少しずつ用水路らしくなっている。河道③は連続堤防に伴って発生したものと見られ、河道内洲の前縁が掘り崩された形となり、大量の砂礫が通過する。下流部を掘り崩し、河道①との合流部を開放する。予想される膨大な砂礫の堆積を防ぐ。2016年10月27日



河道①・河道③の合流部。河道内洲の前縁同士が重なり、深い流れを作っている。取水口部からの落差は約 4.5m（／500m）以上、連続堤防で形成された深掘れを利用して河道③の水量を増し、主流を分割しようとする一種のショートカット。2016年10月27日



取水門前面。手前は砂利吐きに連続する「砂利溜め」。山田堰のように堰前後の落差がとれないので、浅く広くとり、傾斜をつけて砂吐きに導く。2016年10月27日



砂利吐きの作業風景。連続堰以来、ほぼ同一のスタイルが確立され、作業も手馴れてきている。2016年10月27日



砂吐きを上流側から見る。前縁に堰板部分を設け、一応「部分可動堰」とは呼べる。2016年10月27日



用水路掘削の最先端は約 380m、レベルとりの鬼、ブディアライのザビのグループが監督する。一週後に水路床と側壁の造成が開始される。護岸は 500mを完了、巨礫輸送が急ピッチで進められている。2016 年 10 月 27 日



護岸 400m地点から取水口側を望む。500mまでは、護岸沿いに主流を引き込んで急流を作る。既存の捨て石工をさらに強化、湾曲を矯正して石出し水制を設置、岩盤並みに仕上げる。2016年10月27日



900m地点の沈砂池 I 候補地。まず交通路を導いてレベルを確認する。池の深さは用水路床より 1.5~2.0m深い。陸側のジューイ（既存小水路）への分水路（約 1.5 km）が送られ、河側の主幹水路の水量調節が行われる。ここが対岸地区全体の灌漑の要衝となる。2016年10月27日



沈砂池の河側は、河道①・③が再び合して深い急流を作っている。住民が作った堤防の残骸が至る所で見られる。河と人間は互いに干渉しあいながら、結局は河の大きな流れに呑み込まれていく。逝くものはかくの如きか。人里は、その隙間でせいぜい数百年の時を許されているに過ぎない。2016年10月27日



500m地点の河道合流部。河道内にできる洲前縁が合し、深い流れを作っている。この状態は年々変化するが、大洪水後に固定された河道は、案外動きにくい。特に岩盤や強力な堤防沿いがそうで、今回も強力な護岸でむしろ洗掘を起こさせ、主要河道を固定する試み。最終的には河に任せる。2016年10月25日

